

花塵

かじん

連城三紀彦



花塵

連城二紀彦

花塵^{かじん}

一九九四年一月一日 第一刷発行

著者——連城三紀彦^{れんじょうみきひこ}

©Mikihiko Renjyō 1994. Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—十二—二十一 郵便番号 一—二—〇—一
電話

出版部(〇〇三)五三九五—三五〇五
販売部(〇〇三)五三九五—三六二二
製作部(〇〇三)五三九五—三六一五

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

花塵

装幀・写真 上原ゼンジ

第一部

一

私がNから、父親の遺稿があるが読んでみないかと言われたのは、昨年の晩秋に二人で酒田へ旅した際である。

十一月半ばにNから電話が入って、

「母親の二十三周忌に酒田へ墓参りに行くんだが、君もつきあわないかと誘われた。」

その少し前に一緒に飲んだ際、何かの話の拍子に私は「久しぶりに日本海を見たくなった」と言っている。それを憶えていてくれたのだろうと軽い気もちで領いたのだが、新潟から羽越本線に乗り換え、雨の車窓にうつすらと黒い影で日本海が映しだされて間もなく、Nは、

「退屈なら面白いものがあるから読んでみないか。一度も活字にはなっていない物だ」

と言つて、網棚の鞆から原稿用紙の束をとり出し、私に渡してきた。放り投げるような乱暴な渡し方だったので、その黄褐色に褪せた原稿の最初にある『——郎』という名が、Nの父親の名だとはすぐには気づかなかつた。題名と名前だけが草書に崩れてあつて、『鬼女』という題名は何とか読めたものの、名前は『郎』の字以外読みとれなかつた。

それに『鬼女』という題名も、日本の文学史に大きな名を残したNの父親とはかけ離れた、いかがわしきや安っぽさを感じさせた。Nの父親は日本の産みだした文豪の一人で、大正末期から二十年前の死の直前まで精力的な創作活動を続けた。

「父親の形見だよ。死ぬ数日前に、絶対に世間には発表するなと言つて渡された……」
言われてみると、本文が始まってからの硬い鋭角な文字の方には確かに記憶がある。題名と自分の名だけは墨筆で、あとはペン書きだという癖にも、全集のグラビア頁で馴染んでいたはずだつた。

私はNの父親の愛読者である。どの作品のどの一文をとつても国語の教科書に文章の手本として載せられると言われる作家だが、私にはそのどこかに題名の墨字と似た軟らかい崩れがあつて、それが不思議な色艶となつて作品の土台を支える魅力となつていふように思われた。

数年前Nと初めて会つた時にその話をする。「そういう見方をしてくれたのはあなただけだ。皆、官庁御用達の作家のように思っているからね」自分も父親の作品に同じものを感じていたからとNは喜んでくれた。それが二周り近くも歳が離れ、今はもう七十に手の届きかけたNと私の交遊の端緒たんじゆとなつた。

Nはまた「君の作風は父親のと似ているよ。父には世間が信じようとしないう別の顔があつてね、今はまだ無理だが、いつか君にそれを書かせてやるよ」少し謎めいた言い方をした。

「文豪」と言えるNの父親と中堅作家と呼ばれるグループの片隅に何とか引掛かった私とでは地位も実力も較べることすらできないが、高校時代からその作品を食^{むさば}るように読み続けてきたのだから、当然影響は受けている。似ているというのは間違いないかもしれない。Nも作家である。これから語ろうとしている物語と無関係だから、Nと私との交遊の歴史にはこれ以上触れないが、Nについては語っておきたい。——とは言え、Nからは自分と父親の名が出るのだけは困ると言われているので、詳細は省く他はないが、Nは自分でも「俺は、父親のあの分厚い全集の、最後の頁の余白に落書きを書いているだけだよ。古本屋で売ろうという時には値打ちが下がるようなね」と認めているとおおり、父親が文学史に太字で残した名に細く縫^すって作家生活を続けている。

「文豪」から受け継いだ才能の血が決して細くないことは、二、三の短編を読むだけでもわかるが、一緒に受け継いだかなりの財産から生じる余裕が、その血を太く育むのを阻^{はば}んでいるようである。およそ二十年前、父親が死んで間もなくにデビューし、私は後輩になるのだが、例えば後輩がこんな悪口めいたことを書いたとしても笑い飛ばしてくれるようなおらかな性格をしている。書く小説も明るいし、父親譲りの頬に肉を溜めた顔をしじゅう温厚に崩し、冗談も好きな闊^{かっ}達^たな人である。もっとも人の性格には必ず落とし穴があるもので、数年のつきあいのうちに私はNの意外な一面にも気づいていた。時々ふつと考え込むような顔になり、そういう時は私がそばにいても、自分自身がそこに生きてることすらも忘れたような遠い目になって、私には見

えない何かを見ている。そういう時に声をかけると、すぐに我に返って笑顔に戻ることもあるが、ひどく投げやりな声で不意に別人のような意地悪な言葉を口にしたりもする。私とNが話している時は大概酒が入っているので、酒のせいだとも考えられるのだが、それだけでは割り切れない何か根本的に体の芯にしみついた暗いものが、ふっと顔に滲みだしたのだという気がする。

着物の裏地のように、その豊かな笑顔の裏にもう一枚の皮膚が薄く冷たく潜んでいる気がするのである。Nの過去にそんな暗い目つき理由が見つけれられそうな気がするのだが、Nは父親の名声が子供のころから少し煩わしかったという以外に特別変わった過去はないと言っていた。

何もわからないまま、私はただ漠然とNが父親に関して言った「別の顔」をN自身も持っているのだろうと考え、それも日頃は笑顔に誤魔化されて、見過ごしていた。

その酒田に向かう列車の中でも、Nは缶ビールの酒気にうつつすと赤く染まった顔で微笑し、「読めば、父親が世に出さなかつた理由がわかるよ。つまらない短編だし、俺も二十年間隠してきたのさ。こんな物でも父親の名があればほしがる出版社はあるから」そう言うのと、車窓の暗い雨を吹き飛ばすほどの大声で笑った。

自筆の未発表の原稿を読めるのである。私は興奮し、三十枚ほどのその短編にすぐに目を通した。

Nの評価は残念ながら間違っただけではいかなかった。大正末の話である。主人公の男が、偶然カフェで出会った女給と一夜の関係を持ち別れるが、半年ほど経って女が妊娠をしたと言って男を訪れてくる。妻のいるその男からお腹の子をネタにして、脅迫同然に金を巻き上げていく。その後行方知らずとなった女に二十数年が過ぎ終戦後の混乱の最中、東京の一隅で再び出会う——女は街

角に立って客を引いており、彼だとは気づかず、声を掛けてきたのである。男の方はすぐに気づく。『あの時の子供はどうした』と尋ねると『産んだ後他人にくれてやったが、どうやらそいつに殺されたらしいね』と答える……

「話自体は悪くないだろう」

Nがそう言ってきたので私は頷いた。

今説明した話の他に前半、妻の妊娠の話が同時進行している。女給が訪ねてきた直後に妻も妊娠して郷里に戻って出産する。だが、その子供は妻が東京に連れ戻り、二カ月後には肺炎に罹って死んでしまう。男はカフエの女給の恨みでその子供が死んだような気がして苦しむのだが、戦後の再会の際に女が口にした一言で、もしかしたら妻が郷里で産んだことになっている子供がその子ではなかったのか、と考えるオチがついている。

だが、やはり失敗作であろう。

そのオチが前半で読めってしまう上に、題名の『鬼女』が結末でその女給から妻に翻るあたりの手際が鮮やかとは言えず、二人の女の性格づけも巧くなされていらない。もとよりNの父親の作品には女が余り登場しないし、登場するのは皆、情の深い心根の優しい女ばかりである。女に現実感がないという批判もあるが、点描のように描かれる女たちには光が凝縮されたような精彩があって、私などは日本の作家の中でもっとも女を描くのが巧かった一人と考えている。

その精彩が悪女という設定の鉄棒に嵌め殺しになり、死んでしまっている。

「こういう女を書くのは最初で最後だったんだろうね。それで失敗してる」

私はNのその言葉にも頷きながら、

「この主人公の坂崎という男は尋常小学校の教師ということになっているけれど」
お父さん自身ではないのかと、真っ先にそのことを聞いてみた。

作品自体の評価よりも、読みながらそのことに私の興味は動いていたのだった。

Nは頷いた。

「それだけではなく、この女給の方にもモデルがいる」

「まさか……実話だというわけではないでしょう」

Nは眉根に神経質そうな皺を寄せ、「もちろん、妻というのは俺の母親に当たる女だからね、
子供に肺炎を患わせて殺したなんて話はフィクションだが」と言い、一呼吸おいて、

「父親とその女給のたった一晚の関係というのは本当ではないかと思う」

と続けた。そうして唐突に、

「君は日本画には詳しいが、洋画の方は？」

と聞いてきた。

「いいえ、油絵の方はほとんど……」

「しかし、秋原柁平の名前ぐらいは知っているだろうか？」

終戦後の画壇の復興期に登場し、独特な淡彩風のタッチで大きな名を売った画家である。もちろん知っていた。水色を基調にした色彩感、人物だけでなくちよっとした東京の街角を描いても翳のある詩情を漂わせていて、日本人好みの感傷をもっている。たぶん日本の産み出した洋画家としては十本の指に入るだろうし、死後は海外でも評価を受けるようになった。

「その母親も画家だったことは？」

「——さあ、そこまでは」

「だろうな。自分の息子を描いた一枚の絵以外はほとんど埋もれているから。私もその絵しか見たことはないんだが、その絵に関する限りはかなりの才能だと思う……」

ちよとど自分とは反対で、子供の方の名声の下敷きになってしまったんだよ、Nはそう言つて笑つた。

「もつとも、秋原柝平に絵筆を握らせたのはその母親だったのだから、それだけでも彼女の存在価値はあつたわけだが……それに秋原の絵にある『憂愁』というか孤独の翳りみたいなものも、その女が与えたものだろうからね。つまり秋原の絵はその女が秋原の体とともに産み落としたものとも言えるわけだ」

「孤独というと……母親が息子に孤独を与えたという意味ですか」

Nは頷き、原稿用紙の題名を指で叩いた。

「子供を産み落とすとすぐに捨てたくせに、戦後はその子供を食い物にしたんだから」

Nはため息をつき、

「まだ、お腹のなかにいる時からね」

と言うと、原稿の頁を繰り、女給が妊娠を材料に主人公の教師を強請るくだりをもう一度私に見せてきた。

「このあたりが事実だと……」

半端になつた私の声にNは頷き、それから今度も唐突に十色漣といろせんや甲賀剣三こうがけんざうといった大正から昭和にかけての油絵画家の名を何人も出した。ほとんどが美術史に残る大家で、私が名前を知らな

いのは一人だけだった。

「カフエ勤めをしながら、裸婦のモデルをしていて、そういった連中の間を渡り歩いてた……モデルとしてだけじゃなく。だから妊娠といっても本当に親父の子供だったかどうかはわからないんだが……」

「可能性はあるということですか」

Nは顔から笑みを消して頷いた。

「ということとはつまり、秋原柁平の父親が……あなたのお父さんだという可能性が……」

「あるな」Nは少しぶつきら棒に言った。

「問題はこの話が関東大震災の前か後かだ。君は知らないか、秋原柁平が生まれたのが関東大震災の日だったことは……震災の衝撃で予定より二月も早く母親が産気づいたと言われている。つまり大正十二年九月一日だよ。秋原柁平の父親は戸籍では箕子の最初の夫だった齊藤忠になっているが、本当は他の男らしい。昔から、十色漣ら当時つきあいのあったいろんな男の名があがっているが、最近では一夜だけのゆきずりの男だというのが定説になっている。『秋原』という姓だけがわかっている、芸術関係とは無縁な市井しせいの男だと——箕子自身が『柁平を画家にする時に戸籍名の齊藤柁平ではさびしいから、本当の父親の姓をつけてやった。街で拾って抱いた一晩きりの男だから姓だけしか記憶に残っていないけど』と周囲の何人かに得意げに話していたというからね。だが、どんな嘘でも平然とつく女だと言うから、秋原姓の男というのが実在したかどうかも疑わしいし……もし、この『鬼女』の話が震災前だったとすれば……」

確かに秋原柁平が、文豪の一夜の遊びの結晶だった可能性は出てくる。『鬼女』の中には『大

正十二年だったか、十三年だったか」という記述しか出てこない。女が妊娠を告げに来訪したのが『季節外れの夕立が通り過ぎたあと』とあり『女はそんな時季でもないのに暑苦しうに扇子せんすを使って』とあるから、真夏でないことはわかるが、春と秋のどちらに近い日なのか、季節も定かではない。

「そうだとすれば、ちょっとしたスキャンダルですね」

美術界の大物が世界的にも名のある文学者の子供だったことになる。しかも文豪は教科書的な真面目さで文学と取り組み続けたことでも有名な人なのである。

「だがね、俺にとってはそのことはどうでもいいんだよ。むしろ秋原が親父の息子であってくれた方が有難いと思ってる……俺にとつての問題は別なんだ。万が一、この話が震災の後のことで大正十三年だった場合……」

私はNの横顔を隣の席から盗み見るような目で見た。その時にはもう、Nが言おうとしていることがわかったが、もちろんそれを私の方から口にすることはできなかった。

私はNの膝の上の原稿をとって、雨の夜のくだりにもう一度目を流した。夕闇をもうほとんど夜に変えて雨は車窓を襲い続けている。

列車の轟音だけで、ガラス一枚隔てた激しい雨には音がない。雨音はむしろ、原稿の中から響いてくる。『季節外れの夕立が通り過ぎたあと——』書かれているのはたったそれだけが、褪せたペン字の中に何十年と閉じ込められていた大正末の遠い一日の雨音が、今やっと他人の目に触れて、古びてしけたような匂いのする原稿用紙へと滲みだしている……そんな気がした。

「俺は、大正十四年の生まれだからね」

Nの眩きが聞こえた。声だけでも顔から笑みが消えたのがわかった。その暗く翳った声で、Nはまた、

「俺がその女の腹のなかの子だという可能性もあるんだ」
そうも言った。

季節外れの夕立が通り過ぎたあと、女は濡れた着物と髪で玄関先に立っていた。

着物も髪も羅のように貼りついて女の体の別の肌になっていた。と言うよりもその豊満な体は雨に叩きつけられて薄くなった着物なぞではもう包みきれなくなったというように溢れだして見え、メリンス布団のような下卑て派手なその大輪の花模様が直に肌に描きこまれて見えるのだ。そう言えば半年前のあの夜も、ランプの灯を受けると束の間、女のただ白い肌に錦絵のような艶やかな色彩が焙りだされた気がして、坂崎は夜も明けるころ、「ふつうとは逆さに肌の裏に刺青をしてる体だね」と言った記憶がある。

一目見て、半年前のあのカフェの女だとわかったものの、坂崎は、
「何方ですか」

と一向に知らない顔をした。

だが、女の方が上手である。通り雨の後の光は夕暮れ刻とは思えない眩しきで敷居を越えて流れこんでくるのだが、その光を追い出すように戸を閉めながら「お話があるんです。あげてくださいいな」と目尻に細く笑みを流した。坂崎の嘘などその切れた目で簡単に見抜いている。

坂崎が仕方なく頷くと、

「奥さんは御在宅」

と訊いた。妻は一時間ほど前に買い物に出掛けた。帰りが遅くなっているのは雨宿りになったせいだろう、だがもう今にも帰ってくるはずだと言うと、女は框の上から脱いだばかりの下駄を揃みあげて懐に押し込み、「帰ってきたら、三十分ほどまた外に出掛けさせて」と言った。

坂崎がその女を奥の部屋に通し「話というのは」と訊いた時、早くも表の路地に妻の物らしき足音が響いた。

坂崎は玄関へと駆け戻り、妻に敷居を跨がせず、「書き物をしているが、インクがなくなつたので買ってきてくれ」と頼み、妻の手から買い物籠を奪いとつた。従順な妻であるから、別に疑る気配も見せず一度開けた戸を自分の手で閉め直し、下駄音を遠退かせた。

奥の部屋に戻ると、女は坂崎の慌てぶりにひとしきり笑い声を挙げた後、恰もそこが自分の家でもあるかのように落ちついた風に座って「あの晩の付けを払ってもらおうと思ひましてね」と言つた。

あの夜の体の代金を払え、という意味に相違ない。女が金銭に困っていることは、玄関に立つたのを見た最初の一瞥でわかつた。媚びた目尻の笑みが、既に強請であつた。

女はまたその目で、坂崎の胸中の声を読みとつた様子である。

「私の体の御代ではありませんよ。私は自分の体を売り物にするような安手の女ではありませんから。でも、あなた、私の体の中に不要なものを忘れていったから」

女はそんな時季でもないのに暑苦しそうに扇子を使ってそう言ったのであるが、不意に膝を崩すと、畳んだ扇子の先端を着物の裾に忍びこませた。雨露を畳へと滴らせながら、濡れた着物は

活魚のように蠢蠢いていて、ちょうど出刃でその皮を剥ぐように、女は扇子を滑らせた。裾裏の闇を細く割って、足もとから上方へと一寸刻みに上っていった扇子は、上りきったあたりで止まった。

「命という大きな忘れ物。でもこの命は私とは何の関わりもなく、あなたが私の体の中に勝手に落としていったものですから、生かすも殺すもあなたが決めて下さい。生かして産めというのなら、大枚を支払ってもらいますけれど」

身籠みごもったことに嘘はないようである。豊かな肉付きのために気づかなかったが、よく見ると腹が微かにせり出して、帯に余分な弛ゆるみがある。

「たとえそれが、本当に私の子供だとしても、お前の子供でもあるわけだろう」

何の関わりもないという言葉に呆れて、坂崎は先ずはそんな言葉しか返せなかった。

「私の体に私以外の生命が宿るはずありませんよ。私は子供を生むために生きているのではなくて、男と同じようにただ自分のために生きているのですからね」

居直ったときか思えない言葉を、心底から信じてでもいるのか、坂崎の詰詰るような目を不思議そうに見返してそう言った。

「お金がないのなら、殺しても構いませんよ。知り合いの医師に頼むからそれでも多少の金は掛かるけれど……どうなさいます」

「平気なのか、本当にそれでも」

「男が勝手に忘れていった荷物を後生大事に抱えて生きていくほど私はお人好しではありませんからね。本当なら一人で始末してもよかったのだけれど、多少の金も都合のつかない時期だし、